

孤独な人間の声

リユドミラー・イグナチエンコ
消防士、故ワシーリイ・イグナチエンコの妻

なにをお話しすればいいのかわかりません。死について、それとも愛について？ それとも、これは同じこと难道でしょうか。なんについてでしょうか？

私たちは結婚したばかりでした。買い物に行くときも手をつないで歩きました。「愛しているわ」って私は彼にいう。でも、どんなに愛しているかまだわかっていませんでした。考えてみたこともなかった。私たちは夫が勤務している消防署の寮に住んでいました。二階に。寮にはほかに若い家族が三家族いて台所は共用でした。一階には車が止まっていた。赤い消防車。これが夫の仕事です。いつも知っていました。彼がどこにいるか、彼になにが起きているか。

夜中に外がざわついていて。窓からのぞいてみたんです。夫は私に気づいた。「換気窓を閉めておやすみ。発電所が火事なんだ。すぐにもどるよ」

私は爆発そのものは見ませんでした。炎を見ただけ。なにもかも光っているようでした。空一面が。高く燃えあがる炎。すす。ひどい熱気。夫はいつまでたっても帰ってこない。すすはアスファルトが燃えたためです。発電所の屋根はアスファルトでおおわれています

たから。タールのなかを歩いてるようだったと、あとで話してくれた。炎をたたき消し、燃えている黒鉛を足でけりおとした……。夫たちは防水服をきないで行きました。シャツ一枚のまま出動したのです。警告はなかった。ふつうの火事だと呼び出されました。

四時……五時……六時。私たちは六時に彼の両親のところに出かける予定でした。ジャガイモの植えつけに。両親のいるスベリジエ村はブリピヤチ市から四〇キロのところですが種をまいたり、耕したり。夫の好きな仕事です。彼の母親は「私たち、あの子を町に出したくなかつたのよ。家だつて新築したのに」とよく話していました。彼は徴兵されて、モスクワの消防部隊で兵役についたのです。帰ってきたときには消防士になることしか考えていなかった。ほかの仕事は彼の頭にはありませんでした。(沈黙)

ときおり彼の声が聞こえるような気がします。生きている彼の。声でするとはつとする、写真をみるよりずっと。でも、彼は一度も私を呼んでくれない。夢のなかでも。彼を呼ぶのは私のほう。

七時。七時に夫が病院にいと教えられました。私は病院へ走りましたが、病院のまわりはすでに警官に囲まれていてだれも通してくれない。救急車だけが入っていく。警官がどなつていた。「車は計器がふりきれられるほど汚染されてるから近寄らないでくれ」。私だけではありません。その夜、自分の夫が発電所にいた妻たち全員がかけつけていました。私はこの病院で働いている顔見知りの女医を大急ぎでさがしました。車からおりた彼女を見

つけ、白衣にしがみつきました。「なかに入れて!」「だめよ! 容体が悪いわ。彼ら全員が悪いの」。私は彼女をつかんだまま「ひと目でいいの」「しかたないわね、一五分か二〇分よ。さあ、急いで」

夫に会いました。全身がむくみ、腫れあがつていた。目はほとんどなかった。「牛乳が必要よ。たくさんね。全員が三リットルずつ飲めるくらいたくさんいるわ」と彼女。「でも、夫は牛乳を飲まないのよ」「いまは飲むわ」。この病院のほとんどの医者、看護婦、特に看護員はこのあと病気になるり亡くなります。でも、このときはだれもそんなことは知りませんでした。

一〇時、「原釜」運転員のシシェノークが死亡。最初の死者でした。一日目に。私たちは二人目のワレーラ・ホデムチュークが瓦礫のしたにとり残されていることを知っていました。彼は、ついにつれだされることなく、コンクリートで固められてしまった。でも、私たちは、夫たち全員が最初の死者になるなんてまだ知らなかったのです。

「ワーシャ、私はなにをすればいい?」「町をはなれるんだ! でていくんだ! きみは赤ん坊を生むんだから」。私は妊娠していました。でも、どうして夫を残していけて? 夫は「でていってくれ、赤ん坊を救うんだ」と頼みます。「まずあなたに牛乳を持ってこなくちゃ。それから決めましょう」

3 孤独な人間の声
私の友だちのターニャ・キベノークがかけつけました。彼女の夫も同じ病室にいました。

彼女は父親の運転する車でできていました。私たちはその車で一番近い村に牛乳を買いに行きました。町から三キロほどのところですよ。みんなが飲めるように三リットルびんの牛乳を六個買いました。でも彼らは牛乳を飲むとひどく吐いた。絶えず意識がもうろうとしており、点滴を受けていた。医者たちはどういうわけか、これはガス中毒だとくりかえすばかりで、放射能のことをくちにする医者はいませんでした。

町には軍用車があふれ、道路はすべて封鎖されました。電車も自動車も止まった。白い粉のようなもので道路が洗われていた。明日、どうやって村までしぼりたての牛乳を買いに行けばいいのかしら、私はそれが気がかりでした。放射能のことはだれもいわなかった。軍人だけがガスマスクをつけていた。人々は店で買ったパンを手にして歩いている。パンが入った袋のくちは開いたまま。街頭ではキーキが売られている。

夕方は病院に入れてもらえませんでした。まわりは人の波。私は彼の窓の真向かいに立ちました。彼が窓に近寄つてなにか私にさげんでいる。絶望的なようです。人ごみのなかでだれかが聞き取ってくれた。夫たちは今夜モスクワにつれていかれるんだと。私たち妻はひとかたまりになりました。夫たちについて行くのよ、そう決めました。私たちを夫のところへ行かせてよ！ あんたたちにとめる権利なんてないわ！ つかみあい、ののしりあい。兵士たち、もう兵士がそこに立っていますでしたが、彼らは私たちを押しつける。そのとき一人の医者ができてはつきりと言いました。夫たちが飛行機でモスクワに発つこと。

私たちは夫に服を持ってこなくちゃならないこと。発電所できていた服は焼け焦げていましたから。バスはとつくに止まっていたので、私たちは町じゅう走りまわりました。手さげ袋を持ち、走つてもどつてみると、もう飛行機は飛びたつたあと。だまされたのです、私たちが泣きわめいたりしないように。

夜中。道路の片側には何百台ものバス(町はすでに疎開の準備に入っていた)、反対側には何百台もの消防車が方々からかけつけていました。道路は白い泡だらけ。私たちはその道を歩いた。悪態をつき、泣きながら。

ラジオで告げられました。「町は三日から五日の予定で疎開します。森でテント生活をしますので暖かいものとスポーツウエアを持って行ってください」。人々は喜んだほどです。自然のなかへ！ 森のなかでメーデーを迎えよう。こんなことはめつたにないこと。道中とするパーベキユーの用意をしていた。ギターやテープレコーダーも持って。泣いていたのは夫が被災した者だけ。

どこをどう行つたのか、覚えていません。気がつくと目の前に彼の母親がいました。「ママ、ワシヤはモスクワにいるの。特別機でつれて行かれたの！」。でも、私たちは残りの野菜を植えたのです。一週間後にはこの村も疎開させられたのですが、そのときは、そんなこと知りませんでしたから。夕方私は吐きはじめました。妊娠六ヶ月。とても気分が悪かった。夜、夫が私を呼んでいる夢をみました。夫は、生きている間は夢のなかで

「リューシャ、リューセンカ!」と私を呼んだ。死んでからは呼んでくれない。一度も……(泣く)。ひとりでモスクワに行こう、そう考えながら朝起きました。「そんなからだとどこに行くの?」。母が泣く。父は通帳のお金をぜんぶおろしてくれました。

どうやってモスクワまで行ったのか、道中はまたもや私の記憶から抜け落ちていきます。モスクワで最初にであつた警官に、チェルノブイリの消防士がどこの病院にいるか聞いて教えてもらいました。

シュキンスカヤ通りの第六病院。

この病院、特別放射線科に入るには通行証が必要でした。守衛に現金をわたすと、通してくれました。そのあとも、だれかに頼んだり、懇願したりして、ついに、放射線科部長のアンゲリーナ・ワシリーエブナ・グスコワの執務室にきました。当時私はまだ彼女の名前を知りませんでした。なにも覚えていません。ただ、彼に会いたい一心だけ。

彼女はいきなり私に質問しました。

「子どもさんはいますか?」

どうしてほんとうのことをいえて? それに、妊娠してることもかかさなきゃいけない、すでに理解していました。夫に会わせてくれないに決まっています。私はやせていて、お腹が目立たないので助かりました。

「います」

「何人?」

考える。二人つていわなくちゃ……。一人だと、やっぱり会わせてくれないつもりだ。

「息子と娘がいます」

「二人いるのなら、もう生まなくてもいいですね。じゃあ、聞いて。中枢神経系が完全にやられています。骨髄もすべておかされています」

まあ、いいか、彼はちよつぱり神経質になるんだわ。

「まだ聞いて。もしあなたが泣きだしたら、すぐに帰ってもらいます。抱擁もキスもいけません。そばに行くのもだめ。三〇分間ですよ」

でも、私はもう病院からでるつもりはありませんでした。でるときは、彼もいつしよ。そう自分に誓ったのです。

病室に入つてみると、夫たちはベッドにすわり、トランプをしながら笑っています。

「ワーシャ!」。大声で彼が呼ばれる。

夫がふりむく。

顔の腫れはひいていました。なにか点滴を受けたのです。

「どうして突然いなくなつちやつたの?」と私はたずねます。

彼は私を抱きよせようとします。

「すわつて、すわつて」と医者か彼をささぎる。「ここで抱き合うんじゃありませんよ」

もうここにはほかの病室からもみんな集まっていました。全員プリピヤチ市の仲間。ぜんぶで二八人が飛行機に乗せられてきたのです。あつちはどう？ 私たちの町はどんなようす？ 私は答える。疎開がはじまつたわ、町ぐるみ三日から五日間の避難よ。みんなは黙ったまま。女性も二人いました。ひとりは事故当日当直の守衛でしたが、泣きだしました。

「ああ、なんてこと！ 子どもたちがあそこにいるのに。あの子たちはどうなったかしら？」

私は、ほんの一分でもいいから彼とふたりつきりになりたかった。みんなは私の気持ちを察して、それぞれなにか口実をもうけて廊下にでていった。私は彼を抱いてキスをしました。彼はよけるのです。

「となりにすわつちやだめだよ。椅子を持っておいで」

「そんなのぜんぶばかげているわ」へつちやらよ。

「爆発が起きた場所をあなた見たの？ なにがあつたの？ だつてあなたたちが一番先にあそこにかけてつたんだもの」

「妨害工作にちがいないよ。仕掛けたやつがいるんだ。ぼくの仲間はみんなそう考えている」

当時はそううわさされ、考えられていたんです。

翌日、私が行つてみると、夫たちはすでに別々の部屋に寝ていました。廊下でできることは嚴重に禁じられていました。おたがいに行きさずすることも。壁をたたきあつていました。トン・ツー・トン・ツー……。

医者の説明はこうです。ひとりひとりの身体は被曝線量に対して異なつた反応を示す。ある者には耐えられることが、別の者には耐えられないんだと。彼らが寝ていた部屋は壁ですら針がふりきれるほどの放射能です。右、左、下の階、そこにいた患者は全員移されて、一人もいません。上の階にも下の階にもだれもいませんでした。

私は、モスクワの知人たちの家に三日間泊めてもらいました。お鍋でもお皿でも、必要なものなんでも使つてね、といつてくれた。私は、七面鳥のスープを六人分作りました。私の仲間たち、同じ班の六人の消防士のために。みんな、あの夜、当直だつたんです。ワシユーク、キベノーク、チチェノーク、プラービク、チシュエラ。いまになつて、私は、知人たちにはほんとうに驚いています。彼らは、もちろん、恐れていた。恐れないではいられなかつたでしょう。すでにいろんなうわさが広まっていたから。それなのに私にいつてくれた。必要なものなんでも使つてね、使つていいのよ。ご主人はどう？ あの人次どう？ 助かりそう？ 助かる……(沈黙)。あのとき、私はたくさんの人に親切にしてみました。夫、ただ夫のことだけでした。年配の看護員を覚えています。彼女は「なお

らない病気があるの。すわって手を撫でてあげなくちゃ」と教えてくれました。
朝早く市場にでかけ、その足で知人の家に向かい、スープを作ります。材料をすべて裏ごししたり、みじん切りにする。「リングを持ってきて」と頼む者もいます。半リットルびん六個を持って病院へ行く。いつも六人分。夕方まで病室にいます。夕方になるとまたモスクワの反対側のはずれまで帰ります。体力がどれくらいもつかしら？ でも三日後、病院の敷地内にある医療関係者用の宿舎に泊まってはどうかとすすめられました。ああ、なんという幸運！

「でもあそこには台所がないわ。どうやって食事の用意をしてあげようかしら？」

「もうその必要はありません。彼らの胃は食べものを受けつけなくなっています」

彼は変わりはじめました。私は毎日がう夫に会ったのです。やけどが表面にできました。くちのなか、舌、ほほ。最初に小さな潰瘍ができ、それから大きくなった。粘膜が層になつてはがれ落ちる。白い薄い膜になつて。顔の色、からだの色は、青色、赤色、灰色がかつた褐色。でもこれはみんな私のもの、私の大好きな人。とてもことばではいえません。書けません。

私は彼を愛していた。でもどんなに愛しているかまだわかつていなかった。結婚したばかりでしたから、こんなこともありました。通りを行きながら、彼は私を抱きかかえくるるまわりだす。そしてキスの雨。そばを通りすぎる人が、みんな笑っていた。

放射線症病棟での一四日……。一四日で人が死ぬんです。

宿舎に移った日、放射線測定員が私の測定をしました。衣服、バッグ、財布、靴、なにもかも光っていました。その場でぜんぶ取りあげられた。下着まで。残してくれたのはお金だけ。代わりにもらつたのは病院の部屋着と室内履きでした。衣服は返してあげるかどうかわからないといわれた。おそらく「きれい」にはならないだろうからと。ダブダブの部屋着をきて彼の前にでると、「いつたいどうしたんだ」と目を丸くしていた。それでも私はうまく工夫してスープを作っていました。ガラスびんに水を入れ電気の湯沸かし棒を立ててお湯を沸かし、そこに細切れのトリ肉を入れる。小さな小さなお肉。あとになつて宿舎の掃除婦だつたかフロア係の女性だつたか、自分のお鍋をくれました。小さなまな板もだれかにもらつたのでパセリをきぎみました。私は病院の部屋着をきていましたから、自分で市場に行けません、このパセリもだれかが持つてきてくれたのです。でも、すべてはむだ……。彼はもう飲むこともできなかつた。生卵も飲み込めない。私はなにかおいしいものを手に入れたかつた。そうすれば食べるかもしれない。私はなにかおいしい「すまません、イワノ・フランコフスキの両親に大至急電話をかけたのです。夫がモスクワで死にそうなんです」。局員は、私がどこからきたのか、夫が何者かをすぐに察して、即座に電話をつないでくれました。その日のうちに私の父、姉、兄がモスクワに飛びました。私の身の回り品を持つて。お金も。

五月九日(対独戦勝記念日)のこと。彼は日頃から「モスクワはきれいだが、特に戦勝記念日に花火が打ち上げられるときが。きみに見せたいなあ」といつていました。病室で彼のそばにすわっていると、彼は目を開けました。

「いま昼かい、それとも夜？」

「夜の九時よ」

「窓を開けてごらん。花火がはじまるよ」

窓を開ける。八階です。私たちの目の前にモスクワの街が広がっている。空に花火のブーケがいきおいよく舞い上がる。

「すばらしいわ!」

「きみにモスクワを見せてあげるつて約束しただろ。そして、祝日には一生きみに花を贈るつて約束もしたよ」

ふりむくと、彼は枕のしたから三本のカーネーションを取りだしている。看護婦さんにお金をわたして買ってきてもらったのです。

かけよつてキスをしました。

「私のかけがえのない人。愛してるわ」

彼はぶつぶついう。

「きみはお医者さんになんていわれてるの? ぼくに抱きついちゃいけない。キスもだ

めなんだよ!」

彼を抱くことは許されていませんでした。でも私は、彼を抱き起こしたりすわらせたり、シーツを取り替えたり、体温計を入れてあげたり、便器を運んだりしていました。だれもなにもいいませんでした。

私はめまいを起こしましたが、幸いなことに、病室ではなく廊下でした。窓枠につかまりました。医者が通りかかり、私の手を取ってくれました。そして不意に、

「妊娠していますね?」

「ちがいます、ちがいます」

だれかに聞かれはしないかと、とてもびくびくしました。

「うそはおやめなさい」。医者はため息をついた。

私はすっかりうるたえてしまい、彼に口外しないよう頼むことができなかつたのです。翌日放射線科部長に呼ばれました。

「どうして私にうそをついたの?」

「しかたなかつたんです。ほんとうのことをいえば家に帰されたでしょうから。許されるうそです」

「とんでもないことをやらかしたのよ!」

「でも、いつしよにいたいんです」

私はアンゲリーナ・ワシリーエブナ・グシコーワに一生感謝します。一生！

ほかの妻たちもやつてきましたが、もう病院には入れてもらえませんでした。私といたのは彼らの母親です。ボロージャ・プラービクの母親はずつと神さまにお願いをしていた。「いつそ私のほうをお召しください」と。

アメリカの教授、ゲイル博士……。骨髄移植手術をしてくれた人です。私を慰めてくれました。希望はある、小さいけれども希望はあるんだ。からだは頑丈だし、たくましい若者じゃないかと。夫の肉親が全員呼ばれました。ベラルーシから姉と妹、レニングラードで兵役についていた弟がきました。一四歳の妹のナターシャは泣きじゃくり、おびえていました。でも彼女の骨髄が最適だったのです……(黙りこむ)。私は、このことを話せるようになったんです。以前はできなかつた。一〇年間くちを閉ざしていました。一〇年間。

(黙りこむ)

夫は、骨髄が妹から取られることを知ると、きつぱりとことわりました。「死んだほうがましだ。妹にふれないでください、子どもなんです」。姉のリューダは二八歳で看護婦でしたから、どういうことになるか理解していました。「生きててほしいの」と姉は提供に同意したのです。私は手術を見守っていました。二人は並んだ手術台に寝ていました。手術室が見える大きな窓がありました。手術は二時間。終わつたときには姉のほうか夫よりも容体が悪かつたのです。胸に一八本の穿刺、麻酔からなかなか醒めませんでした。い

まも病弱で身障者です。美しく健康な娘さんでしたのに。結婚しませんでした。当時私は夫の病室と姉の病室の間を行ったりきたりしました。

夫はもう一般病室ではなく無菌テントのなかで寝ていました。透明なシート内に立ち入ることは禁止されていました。特殊装置があつてシートのなかに入らなくても注射をしたり、カテーテルを差し込んだりできるのです。ぜんぶテープと留め具でとめられていたから、私は使い方を覚えただけです。わきに寄せて、彼のところへ入りこみました。彼のベッドのそばに小さな椅子がありました。容体が悪く、一分たりとも彼のそばをはなれられませんでした。

たえず私を呼ぶのです。「リューシャ、どこにいるの、リューセンカ」。ほかのテントには夫の仲間がいましたが、看護しているのは兵士でした。病院の看護員が拒否し、防護服を要求したからです。兵士たちは便器を運び、床を洗い、シーツを取り替え、なんでもやっていた。どこからこの兵士たちがあらわれたんでしょう？ 聞いてみませんでした。彼、彼のことしか頭になかつた。毎日耳にするんです。死んだ、死んだ、死んだ。チシューラが死んだ、チチェノークが死んだ。死んだ。槌で頭のとつぺんをなぐられるような気持ちでした。

一日に二五回から三〇回もの下痢。血と粘液が混じっていました。手足の皮膚がひび割れはじめた。全身が水泡におおわれた。頭を動かすと枕に髪の毛の束が残った。私はつと

めて明るくふるまおうとしました。「このほうが便利よ。くしを持ち歩かなくていいから。」まもなく全員が髪を刈られました。夫の髪は私が自分で刈りました。ぜんぶ私がしてあげたかったのです。もし体力が許せば二四時間彼につきつきりだつたでしょうね。一分一秒が惜しかった。ほんの一分でも惜しかった……(長い沈黙)。私の兄がきてびつくりしたんです。「お前を病室には行かせないぞ!」。父が兄にいう。「こんな娘を止めるなんて無理だよ。この娘は窓からだつて入っていくだろう、非常階段を通つてな」

ちよつと部屋を空けて帰つてみると、夫のそばのテーブルの上に大きなオレンジがあつた。ピンク色なんです、黄色じゃなくて。夫はにこにこしている。「もらつたんだよ。きみが食べるといい」。透明のシートの向こうで看護婦が「だめよ!」と手をふっている。夫の近くに何時間か置かれたものはもう元のものじゃありません。触れるのさえ恐ろしいことなんです。「さあ、お食べ」と夫がすすめる。「きみはオレンジが好きだろ?」。私はオレンジを手にとりました。彼は目を閉じてまじろみかけていた。眠らせるためにいつも注射をされていたんです。麻酔薬。看護婦がぎよつとした顔で私を見ている。私? 私はなんでもする覚悟でした。彼が死のことを考えないように、自分の病気が恐ろしいものだと思わないように、私が彼をこわがっていると思わないように。

会話の断片が記憶に残っています。だれかが忠告してくれた。「忘れないでください。あなたの前にいるのはご主人でも愛する人でもありません。高濃度に汚染された放射性物

体なんですよ。あなた、自殺志願者じゃないんですよ! 冷静におなりなさい!」。私に気がふれたように「彼を愛しているの、愛しているの」とくりかえすばかり。彼が眠っている、私はささやく「愛しているわ」。病院の中庭を歩きながら「愛しているわ」。便器を運びながら「愛しているわ」。以前のふたりのくらしを思い出していました。消防署の寮での生活。夜、私の手を握らないと彼は眠りませんでした。それが彼のくせ。眠っているとき、私の手を握っているんです。一晩じゅう。

病院で彼の手を握るのは私。はなしませんでした。

夜中。しーんとしている。ふたりきり。穴のあくほど私を見つめて突然いう。

「ああ、ぼくたちの子どもを見たいなあ、どんな子だろう?」

「名前はなんてつける?」

「きみひとり考えておくれ」

「どうして私ひとり? 私たちふたりいるのに」

「じゃあ、もし男の子だつたらワーシヤにしよう。女の子ならナターシヤだ」

「あら、なぜワーシヤなの? 私にはもうワーシヤはひとりいるわ、あなたよ。ほかのワーシヤはいらない」

私はまだ知りませんでした、どんなに夫を愛していたか。夫、夫だけに夢中でした。胎動さえ感じていませんでした。もう六ヶ月でしたが……。私の小さな赤ちゃんはお腹のな

かにいて、守られていると思つてたんです。

私が夜中彼のテントのなかにいることは、医者たちはだれも知りませんでした。考へてもみなかったでしょうね。看護婦さんたちが入れてくれたんです。最初のうちは「あなた若いよ、なんてことをいいますの？　ご主人は人間じゃないの、原子炉なのよ。いっしょに死んじゃうわよ」と思いとどまらせようと思いました。私は小犬のように看護婦さんのあとにつきまとい、ドアのそばに何時間も立っていました。あの手この手で頼みこんだのです。ついに「あきれた！　正気の沙汰じゃないわ」。朝、医者の回診がはじまる八時前にシートの向こうで「急いで！」と知らせしてくれる。宿舎に走り一時間すぎず。午前九時から午後九時までは通行証をもらつていました。私の足はひぎまで青くなり、むくみ、くたくたに疲れていました。

私がいなるとき、彼は写真を撮られていました。私がいるときにはしません。服を脱がし、裸で。薄いシーツを一枚かけて。私は毎日シーツを取り替えましたが、夕方にはシーツは血だらけになりました。彼を抱き起こすと私の両手に彼の皮膚がくつついて残る。「ねえあなた、お願い。ちよつと協力してね。手とひじでできるだけからだを支えてみてちょうだい。シーツを伸ばして上に縫い目やしわがないようにしたいの」。どんな小さな縫い目でもからだに傷ができました。彼のからだを傷つけたりしないように、私は血がでるほど深く自分のつめを切りこんでいました。看護婦はだれも夫に近づいたり触れたりできなかったに疲れていました。

きない。必要なときには私が呼ばれるんです。それなのに、彼らは写真を撮る。科学のためだといつて。みんなを病室から追い出したいわ。さげびたい！　なぐりたい！　あんたたちよくも平気でこんなことができるわね！　ぜんぶ私のものよ。私の大好きな人なのよ。彼らをここに入れないでおけたらどんなにいいかしら！　どんなに。

病室から廊下にでる。壁ぎわのソファーにいく。彼らを見ないですみますから。当直の看護婦にいう。「夫が死にそうなの」。彼女は答える。「じゃあ、あなたはどうなつてほしいの？　ご主人は一六〇〇レントゲンもあびているのよ。致死量が四〇〇レントゲンだつていうのに。あなたは原子炉のそばにすわっているのよ」

ぜんぶ私のもの。私の好きな人。

それからあと、最後のことは、きれぎれにしか覚えていません。断片的にしか。

夜は彼のそばの小さな椅子にすわっていました。朝八時に「ワーシャ、私いくわね。ちよつと休んでくるわ」と声をかける。彼は、目を開けて閉じる——いっていいよ。宿舎の私の部屋にたどりつき、床のうえに横になつたかと思うと（からだじゅうが痛くてベッドに寝ることができませんでした）、もう看護員がドアをノックするのです。「きて。ご主人のところへ急いで！　情け容赦なくお呼びよ」

その朝は、ターニャ・キベノークに頼まれたんです。「お願い、墓地についていって。あなたがいなくちゃ私いけないわ」。その日、彼女の夫ビーチャ・キベノークとポロージ

ヤ・プラービクが埋葬されるのでした。私の夫とピーチャはなかよしでした。家族ぐるみのつきあいでした。爆発の前日、私たちの寮でいつしよに写真を撮りました。写真のなかの夫たちはほんとうにすてきで楽しそう。あの私たちの生活の最後の日、私たちはとても幸せでした。

墓地からもどつて大急ぎで看護婦の詰め所に電話をします。「夫はどうしていますか?」「一五分前に亡くなりました」。えつ、うそ……。私は一晩じゅう彼のそばにいたのよ。はなれていたのはたつた三時間なのに。窓際に立ち、さけぶ。「どうしてなの? なぜなの?」。天をおおぎさげびました。宿舎じゅうに聞こえるほど大声で。こわがつてだれも私に近寄りません。はつとしました。そうだわ、最後に夫に会わなくちゃ! 会わなくちゃ! 階段を飛ぶようにかけおりました。夫はまだ無菌テントにいました。運びだされていましてよ。彼の臨終のことばは「リューシャ! リューセンカ!」「でていったばかりですよ、すぐにすつとんできますよ」。看護婦が安心させると、深く呼吸をして息をひきとつたそうです。

もう夫のそばをはなれませんでした。棺までつきそつていく。棺そのものは記憶にありません、覚えているのは大きなポリ袋です。遺体安置所で聞かれました。「お望みでしたら、ご主人にさせる服をごらんにいれますが」。見ますとも! 彼は礼装用制服をきせられ、胸のうえに制帽が置かれた。靴ははいていなかった。足が腫れすぎて合う靴がなかつた。

たのです。制服も切られていた。完全なからだはもうありませんでしたから、ふつうにきせることができなかつたのです。からだじゅう傷だらけ。病院での最後の二日間、私が彼の手を持ちあげると骨がぐらぐら、ぶらぶらと揺れていた。骨とからだはなれたんです。肺や肝臓のかけらがくちからでてきた。夫は、自分の内臓で窒息しそうになっていた。私は手に包帯をぐるぐる巻きつけ、彼のくちにつこんでぜんぶかきだす。ああ、とてもことばではいえません。ぜんぶ私の愛した人、私の大好きな人。大きなサイズの靴がなかつた。素足のまま棺に納められたんです。

私の目の前で、制服姿の彼がセロハン袋に押しこまれ、袋のくちが結ばれました。この袋は木の棺に納められ、棺はさらにもうひとつの袋にくるまれました。セロハンは透明で、厚手の防水布のようでした。つぎに亜鉛の棺にこれが丸ごと押しこむように入れられた。そのうえに制帽だけが残っていました。

21 孤独な人間の声

全員集まりました。夫の両親、私の両親。モスクワで黒いスカーフを買ってきました。私たちの応対をしたのは非常事態委員会、だれに対しても同じことをいうのでした。「ご主人」、あるいは「ご子息」の「遺体はおわたしできない。遺体は放射能が強いので特殊な方法でモスクワの墓地に埋葬されます。亜鉛の棺に納め、ハンダ付けをし、上にコンクリート板のせられます。ついでには、この書類にご署名願いたい」。憤慨して棺を故郷に持ち帰るといいだす人がいても、説きふせられてしまうんです。あなたのご主人は英雄

であり、もう家族のものではない。国家的な人物で、国家のものなんです。霊柩車に乗りました。親戚一同と軍人。無線機を持った大佐がいる。その無線機が伝える。「こちらからの指示を待て。待機せよ」。二、三時間ほどモスクワの環状道路を走りまわり、またモスクワにもどる。無線機は「まだ墓地への乗り入れは許可しない。外国の特派員が押し寄せている。さらに待て」

両親は黙ったまま……。母の黒いスカーフ……。私は意識が遠のくのを感じる。ヒステリーの発作です。「どうして私の夫をこそこそとかくさなきやいけなの？ 彼が何者だつていうの？ 殺人犯？ 犯罪者？ 刑事犯？ 私たちがいつたいただれを埋葬するつていうのよ？」「ねえ、落ちついて。母が私の頭を撫でてくれる。大佐が連絡している。「墓地に向かう許可をいただきたい。細君がヒステリーを起こしています」。墓地では私たちは兵士に取り囲われました。護衛つきですすむ。棺も運ばれた。部外者は墓地に通されませんでした。私たちだけ。あつというまに埋葬がおわつた。「急げ、急げ」。将校が指揮をとつた。棺を抱かせてもくれなかった。すぐにバスに乗せられた。すべて人目につかないように。

帰りの航空券がただちに用意され届けられました。翌日の便でした。私服姿ですが、それとわかる軍人がいつも私たちにつきまとい、道中の食べ物を買いに宿舎からでることさえ禁じました。私たちがだれかと話したりしないように、特に私が。まるで私が話すことができたみたいですが、当時、もう泣くことすらできなかった。私たちが宿舎をでるとき、宿泊係の女性はタオルとシーツをかぞえ、すぐにポリ袋にぜんぶつっこみました。きつと燃やしたんでしょうね。宿泊費は自分たちで払いました。一四日分。

放射線症病棟に一四日。一四日で人が死んでしまうんです。夫たち全員が死んだあと、病院では改修工事が行われました。壁がはがされ、床板がこわされ、窓枠やドアがすてられた。

家に帰って私は眠りに落ちました。家に入るなりベッドにたおれこんだのです。三日三晩眠りつづけました。救急車がきて医者がいったそうです。「いいえ。お嬢さんは死んでいません。目を覚まします。非常に恐ろしい眠りです」

私は二三歳でした。

夢をみました。死んだ祖母が埋葬したときの服で私のところにきました。ツリーを飾りつけています。「おばあちゃん、どうしてうちにツリーがあるの？ いまは夏よ」「こうしておかなくちゃね。もうすぐおまえのワーシヤが私のところにくるんだよ。ワーシヤは森で育ったからね」。ワーシヤの夢もみました。白い服をきてナターシヤ、まだ生まれていない娘のナターシヤを呼んでいます。もう娘は大きくなっていました。夫は娘を天井に向かって放りあげては、ふたりで笑っている。私はふたりを見ながら思います、幸せってこんなに単純なものなのね。彼と水辺を歩いている夢もみました。いつまでもいつまでも歩

いていた。きつと、私にいたかつたんでしょね、泣かないでつて。あの世から、空から合図してくれたんです……。〔長い沈黙〕

二ヶ月後にモスクワに行きました。駅から墓地へ、彼のもとへ。墓地で陣痛がはじまつてしまいました。夫に語りかけはじめたばかりのとき。救急車が呼ばれ、アンゲリーナ・ワシーリエブナ・グシコワのもとで出産しました。彼女は当時から「この病院で生むのよ」といつてくれました。予定日より二週間早いお産でした。

見せてもらった。女の子でした。「ナターシャちゃん、パパがナターシャつて名前をつけてくれたのよ」。外見は元気な赤ちゃんでした。ちっちゃな両手、両足。でもこの子は肝硬変でした。肝臓に二八レントゲン。先天性心臓欠陥も。四時間後に娘の死が告げられました。そしてまたです、娘を私にわたさないと。わたさないとどういふこと？ 私のほうこそ、この子をあんたたちにわたすもんですか！ 科学のために娘を取りあげるつもりね！ 私はあんたたちの科学なんて大きらい。憎んでいるわ！ 科学は最初に夫をうばい、今度は娘まで……。わたすもんですか！ 自分で埋葬してやります。夫のとなりに。

〔沈黙〕

あのときはもつとさげんだんです。いま脳卒中を起こしたあとなので、泣いたりさげんだりできないんです。でもお話しします。まだだれも知らないことを。私が娘を、私たちの娘をわたさないと。彼らは木の小箱を持つてきました。「赤ちゃんはこのなかで

す」。見ると、おくるみに包まれているんです。娘がおくるみに……。私は泣きだしました。「この子を夫の足元に埋葬してください。この子は私たちのナターシャだと伝えてください」

お墓には(ナターシャ・イグナチエンコ)の名はありません。夫の名前だけ。娘には名前もなにもありません。

いつも花束を二つ持つてふたりのところに行きます。ひとつは夫に、ひとつは娘のために片隅に置きます。お墓ではいつもひざまずきます。いつも。

キエフに部屋をもらいました。大きなアパートで、現在、原発の人が全員住んでいます。広い二DKの部屋。ワシーシャと私はこんな部屋にაცოგაれていたんです。でも、部屋にいると気が狂いそう。どこを見ても、いたるところに夫がいる。自分で改装をはじめました。じつとしていないで、少しでも気がまぎれればと思つて。そうやって二年間。

夢をみます。私は夫と歩いているのですが、彼ははだし。「どうしてあなたはいつもはだしなの？」「靴が一足もないんだ」。教会に行き、神父さまに教わりました。「Lサイズの室内履きを買つて、だれかの棺に入れさせてもらいなさい。この靴をご主人にわたしてくれるよう手紙を添えなさい」。その通りにしたんです。モスクワに行きその足で教会に行つた。モスクワのほうか夫を身近に感じます。夫はミチノ墓地に眠つていますから。神父さまに、室内履きをわたさなくてはならないわけを話しました。ちょうど老人が運ばれ

てきて埋葬される所でした。棺に近寄って覆いを持ちあげ、室内履きをなかに入れました。「手紙は書きましたか?」「はい、でもどの墓地に眠っているかは書きませんでした」「あの世はひとつです。ご主人は見つかりますよ」

私には生きたいという願望はまったくありませんでした。夜中窓辺に立ち、空を見上げます。「ワーシヤ、どうしたらいいの? あなたがいないのに生きていたくないわ」。昼間、幼稚園のそばを通りかかり、足を止める。このままいつまでも子どもたちをながめていたい。ああ、頭がおかしくなりそう! それで夜、頼みはじめたのです。「ワーシヤ、私ね、赤ちゃんを生むわ。ひとりでいるのがこわいの。もう限界。ワーシヤ」。また別の日には「ワーシヤ、私、男の人はいらなのよ。あなたよりすてきな人なんていないもの。子どもが欲しいの」

私は二五歳でした。

ひとりの男性をみつめました。すべてをうちあげました。正直に。私たちはデートを重ねましたが、自宅には一度も呼びませんでした。家には呼べない。ワーシヤがいますから。私はお菓子工場で働いていました。ケーキを作りながら涙がポロポロこぼれる。泣いてなんかないません。でもポロポロ、ポロポロと。同僚の女の子たちに頼んだ唯一のことは「同情しないでね、同情されたら、私辞めるわ」。みんなと同じでいたかったです。

ワーシヤの勲章が届けられました。赤い色。じつとながめられません。涙がこぼれます。

男の子を生みました。いまは私の生きがいであるこの子がいます。この子はなんでもよく理解できる。「ママ、もしぼくがおばあちゃんのところを二日間行ったら、ママは生きていられる?」。できないわ! 一日だつてこの子とはなれるのはこわい。二人で通りを歩いているとき……あ、たおれそう、と感じた。そのときなんです、脳卒中を起こしたのは。外で。「ママ、お水を持ってきてあげようか」「いいのよ、ここにいる。どこにも行かないで」。子どもの手をつかみました。そこで記憶がとぎれました。意識がもどつたのは病院で。息子の手をぎゅつと握りしめていたので、医者が私の指を広げるのに苦労したそうです。息子の手には長い間青あざが残っていました。いまではでかけるとき「ママ、ぼくの手だけは握らないでね。ぼくママからはなれたりしないから」。息子も病弱です。二週間学校にいくと二週間家にいます。こんなくらしです。おたがいを気づかい合いながら、部屋の中の隅にもワーシヤがいます。彼の写真。夜、私は彼とひたすら話すんです。

原発の職員はみな近くに住んでいます。一生原発で働いてきた人たち。いまでも交代要員として原発に通っています。ほとんどの人は恐ろしい病気や障害がありますが、原発をはなれないのです。今日、どこでだれが彼らが必要とするでしょうか? たくさんの人があつてなく死んでいく。ベンチにすわったままたおれる。家まで、バスを待ちながら、たおれる。彼らは死んでいきますが、だれも彼らの話を真剣に聞いてみようとしません。

私たちが体験したことや、死については、人々は耳を傾けるのをいやがる。恐ろしいこと

については。

でも……、私があなたにお話ししたのは愛について。私がどんなに愛していたか、お話ししたんです。

見落とされた歴史について——自分自身へのインタビュー

スベトラーナ・アレクシエービッチ

——一〇年がすぎました。チェルノブイリはすでに隠喩メタファーになり、シンボルになり、歴史にすらなりました。何十冊もの本が書かれ、何千メートルものビデオフィルムが撮影されました。私たちはチェルノブイリのことはずべて知っているような気がする、事実も名前も数字も。なにかつけくわえることがあるのですか？ それに、あたりまえのことですが、人々は忘れたがっています、もう過去のことだと自分を納得させて。

この本はなんについてですか？ なぜあなたはこの本を書いたのですか？

——この本はチェルノブイリについての本じゃありません。チェルノブイリを取りまく世界のこと、私たちが知らなかったこと、ほとんど知らなかったことについての本です。見落とされた歴史とでもいえるのかしら。私の関心をひいたのは事故そのものじゃありません。あの夜、原発でなにが起き、だれが悪くて、どんな決定がくだされ、悪魔の穴のうえに石棺を築くために何トンの砂とコンクリートが必要だったかということじゃない。この未知なるもの、謎にふれた人々がどんな気持ちでいたか、なにを感じていたかということ。チェルノブイリは私たちが解き明かさねばならない謎です。もしかしたら、二